

平成 20 年 6 月 12 日
利尻 A R 岡田伸也

利尻山遭難対策の注意点

1. 予防

関係各機関の連携で、以下の予防対策を実施したい。

○適切なガイダンス

【利尻山を訪れる人に、安全な登山を楽しんでもらうために伝えるべき情報】

- ・ 1500m以上ある標高差
- ・ 10時間以上かかるコースタイム
- ・ 杓形コースには、登山者がほとんどいない
- ・ 例年7月上旬まで、親知らず子知らずには多量の雪渓が残り、アイゼンが必要
- ・ 登山最新情報を読ませる
- ・ 山頂直下のガレ場はスリップしやすく、想像以上に体力を奪われ、時間もかかること
- ・ 沢に降りてはいけない
- ・ 登山は自己責任で行なうべき

○下山を始めなければならない時間の目安を伝える

- ・ 13:00までには山頂から下山すること。
- ・ 11:00までに8合目長官山にたどり着かないようなら、下山すること。

○適切な装備の案内と、確認の促し

基本は以下の2点

- ①「どんなに軽量化したくても、絶対に削ってはならない装備がある」
- ②「例え5mの区間でも、5分で通り過ぎることが出来る距離でも、行程中に考えられる最悪のケースに対処できる装備を持つこと」→例えば、雪どけ間近の親知らず子知らず、例え雪渓が5mしか残っていないくても、絶対にアイゼンを持たなければならない。

【確認を促すべき装備】

- ・ ヘッドライトと予備電池（無ければ島内で買うことを促してもよい）
- ・ カップ（どんなに天気が良くても上下カップは絶対に持たせる）
- ・ 水（個人差があるが、利尻山には水場が無いこと、また風が強く、体の水分を奪われやすいことから、最低でも1L以上は必要）
- ・ 薬、救急セット
- ・ 携帯電話（電波状態が悪いと、携帯はバッテリーを消耗しやすいので、携帯（バッテリー）の無駄遣いを避けるように促す。→携帯電話は、最後の連絡手段であり、一番大事な救急セットでもある。

○登山計画書の提出

- ・ グループの場合でも、全員の名前、連絡先を記入させること。特に、携帯電話の番号は、全員のものを書かせる。

2. 搜索

的確な搜索とスムーズな連携で、少しでも早く登山者を保護するために、搜索隊がすべきこと（案）

○下山時に道迷いの起こりやすいポイントの把握

【鴛泊コース】

- ・ 3合目～4合目の中間地点にある、沢に1回降りる所。
- ・ 姫沼ポン山線ルート分岐
- ・ 鴛泊コース旧道分岐

【杓形コース】

- ・ 杓形旧道分岐（旧道を下ると林道まで約2時間かかる。ただし旧道の途中には平坦な所や、ヤブが濃い所があり、夜は迷いやすい。旧道分岐から5mのところにある洩れ沢に迷い込むケースも過去にあった。）
- ・ 旧道分岐～見返台間にある沢を横断する箇所（2箇所ある）

⇒上記箇所は、初期搜索の対象になると考えられる。特に、下山が遅れて暗くなってしまった人を迎えに行く場合は、登山口で待機するのではなく、上記箇所にも見張りを付けたい。

○同日、同時間帯に歩いていた登山者からの聞きとり。

まず、当日の登山計画書を調べる。そして、同日に登っていた登山者から、遭難者の足取りを聞き出す。（最後の目撃箇所、疲労度、装備、その時の様子（写真を撮るのに夢中になっていた、など）など）

○登山者と連絡が取れる場合の対応

- ・ 携帯電話を無駄使いさせないように指示を出す
- ・ 利尻山にはクマ、ヘビなどいないことを伝え、遭難者を落ち着かせる
- ・ 現在地の聞き取り（何が見えるか？周りの木の高さは？周りにササがあるか？足元はスコリアか、石か、土か、ぬかるみか？など、目標物が無くても、周囲の状況を聞けば、見当も付けやすい）
- ・ 怪我の有無の確認
- ・ 疲労度の確認
- ・ 装備の確認（携帯電話のバッテリー残量、ヘッドライトの有無、カップの有無、防寒着の有無、食料や水の有無）
- ・ 疲労で下山が遅れているだけの場合、無理に移動はさせず、付近の避難小屋や、トイレブースに待機させる（そのためには、搜索隊がポイントごとの距離を把握していなければならない）

○搜索隊の組織

- ・ 2次遭難を起こさぬよう、無理をしない、させない。
- ・ 搜索隊自身が安易な装備で搜索をしないように、登山・救助用具は、いつでも使えるようにしっかり準備しておくこと